

比較研究』とは何か 『学術月報』 Vol.44No.3』 -1991.03.00

「比較研究」とは何か

— 3年間の研究を終えるに当たって—

中 嶋 嶺 雄

1987～89年度にかけて実施され、1990年度に取りまとめ作業を継続中の文部省科学研究費重点領域研究「東アジアの経済的・社会的発展と近代化に関する比較研究」（略称「東アジア比較研究」）は、延べ110名の研究者が政治学、経済学、歴史学、社会学、哲学、思想史、地域研究など様々な分野から集まってすすめてきた大型の学際的共同研究であった。人文・社会科学系の重点領域研究第一号ということもあって各界から注目され、それなりの困難や試行錯誤もあったが、多くの知的果実を収穫し得たことは幸いであった。三回に及んだ全体会議には、外国の第一線研究者も参加し、論ずべき問題点がほぼ出つくしたように思われる。

このようなかたちで私たちの共同研究に一区切りをつけられるようになったのは、ひとえに各班の研究代表者、研究分担者の御協力と学術審議会各委員および文部省関係者の御支援によるものであり、深く感謝しなければならない。

国内外の反響も数多かっただけに、三年間の共同研究の成果は、様々なかたちで公表されるであろうが、ここでは、私たちの研究がなぜ「比較研究」と銘打ったかについて、若干の考察を試みてみたい。

最近では一般に比較研究ということがよく言われるけれど、なぜ「比較研究」なのかについては、必ずしも理論的な概念規定がないまま用いられている場合も多いように思われる。とくに社会科学分野においては、近年、比較政治学が人気を得ているが、そこにおいても明確な理論的措定のないまま著述されているケースが散見される。

そうしたなかで、比較研究ないし比較学がもっとも早くから体系的に構築されてきたのは言語学の分野であった。言語学においては、諸言語間の比較が不可欠の前提だからであろうが、この点を高津春繁著「比較言語学」（岩波全書、1950年）は、(I)文化的、地理的などの諸前提を問わずに比較する一般的な比較、(II)歴史的関係のあった諸言語間の比較、(III)ある一群の同系統の相似異同を検討し、歴史的発生的関係を考究する比較、という三段階に分け、「比較方法の発見は、我々の視野を文献以前の時代に拡大した」と述べている。まさに比較研究によってこそ、言語学の空間は大きく広がったのであり、その方法はやがて比較芸術学にも受け継がれていった。「すべての観察は比較ということの上に成り立っている」とウィーン学派の美術史学者ダゴベルト・フライは、その著「比較芸術学」（吉岡健二郎訳、創文社、1961年）の冒頭で述べているが、一定のカテゴリーを前提として諸芸術圏の同一性（親近性、相互関係、より包括的な上位の文化圏への従属性）や差異性（特殊性、相互の緊張関係、独自性）を比較するなかでこそ芸術の基本的モチーフが明らかになるのだとしている。

このような比較研究ないし比較学は、歴史学においては比較史として定立した。平板で退屈な実証主義歴史学を激しく批判したアナル派の歴史学者マルク・ブロックは、その著「比較史の方法」（高橋清徳訳、創文社、1978年）において、歴史学における比較とは、相異なる社会状況のなかから二つあるいはそれ以上の現象を選び出し、それらの間の類似性および相違性が生じた理由を説明することだとしたうえで、さらに比較史が地域研究

に結びつくことの重要性を、「もし、地域史研究がなければ、比較史は何もなしえない……逆に、比較史がなければ地域史研究は、何も産み出さないだろう」と述べている。この点で注目されるべき著作としては、アメリカ政治史の碩学ルイス・ハーツ (Louis Hartz) 編著の比較地域史研究 *The Founding of New Societies: Studies in the History of the United States, Latin America, South Africa, Canada, and Australia* (New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1964) がある。ハーツは比較地域研究によって、これらの新しい世界に特徴的な社会的諸断面を全体的な歴史認識において描いている。

ここにいたって、私たちの「東アジア比較研究」との大きな接点が見出されてくるのであり、また、既存の社会諸科学に対する比較地域研究の重要性に改めて気づかされるのであるが (これらの点については、中嶋嶺雄/チャルマーズ・ジョンソン編著「地域研究の現在」<大修館書店、1989年>、参照)、東アジア地域の比較研究という点で、近年の成功した業績として参照すべき研究には、社会人類学の立場からの中根千枝著「社会人類学ニアジア諸社会の考察」(東京大学出版会、1987年)があった。中根教授は、永年のフィールド・ワークの経験に基づいて、アジア諸社会の社会構造を比較分析しているのであるが、中国、朝鮮、日本の社会階層の差異性(紳士・両班・武士)を見事に抽出し、また、中国や韓国の集団構造の特徴を日本・インドおよび中国・日本との比較によって明らかにしている。ここに示唆されているように、制度論的比較研究をX軸とし、東アジア諸地域の文化論的比較研究をY軸として、はじめて総合的な比較研究としての地域研究が完成するのであろう。

さて、ここでいよいよ政治学における比較研究について考えてみよう。すでに見たように、今日、比較政治学は、政治学の重要な一分野になっているが、比較政治学への体系化を理論的に試みたG. A.アーモンドは、まず比較政治機構(comparative government)という枠組で非西欧地域(アジア、中東、アフリカ、ラテン・アメリカ)を分析するための発見的な(heuristic)概念化をおこなって

いる(Gabriel A. Almond, *Political Development: Essays in Heuristic Theory* <Boston: Little, Brown & Co., 1970>)。こうして政治学においては、たんなる比較研究(comparative study of politics)ではなく、比較政治学(comparative politics)が成立してくるのであるが、比較研究を通して政治学はさらに確実な社会科学になってきたと言うこともできよう。内山秀夫氏は、「比較は、比較者にたいしてその目的をはっきりと問いただす。したがって、研究者は比較する場合、確実な歴史認識と歴史評価をもち、それを前提としなければならない」(内山秀夫著「比較政治考」<三嶺書房、1990年>)と述べている。

たしかに比較研究によってこそ、地域研究がそうであったように、理論や仮説が正しい歴史認識や歴史評価に立脚しているか否かを検証し得るのである。この点で文化大革命期の毛沢東中国にたいして多くの中国研究者が犯した誤りは、そのような比較研究の視野をほとんど欠如し、ひたすら情緒的・心情的あるいはイデオロギー的共感に走ったためだと言うこともできよう。共産圏世界の分析についても、一種の地域研究的視角の重要性を強調していた、当代きっての文明史家・歴史社会学者のレイモン・アロンは、比較研究こそ「歴史社会学のもっとも卓越した方法」だと述べ、そのような「歴史的比較の方法によって現象の説明に先立つ理論の正しさがテストでき、またされねばならない」と早くから指摘していた(Raymond Aron, "Conflict and War from the Viewpoint of Historical Sociology", in Stanley Hoffmann (ed.), *Contemporary Theory in International Relations* (Englewood Cliff, N.J.: Prentice Hall, 1960)。

ところで、社会科学の分野では、比較政治学ほどに明確な概念化がなかったとはいえ、「比較研究」そのものは様々なかたちで試みられてきた。比較政治学という用語が一般的であるのに“比較経済学”、“比較社会学”ということがあまり語られないのは、経済学や社会学においては、おのずから比較研究を当然の前提にしているからだと言えなくもない。私たちの課題である近代化という概念に即してみるならば、W.W.ロストウ

(Rostow)の成長段階説は、近代化過程に関する比較研究であったし(『経済成長の諸段階』<木村健康・久保まき子・村上泰亮訳、ダイヤモンド社、1961年>),シリル・ブラック(Cyril E. Black)の近代化論は類型論的比較研究であった(武田清子編『比較近代化論』<未来社、1970年>,参照)。

先のアーモンドには、J.コールマンとの共編著『発展途上地域の政治』The Politics of the Developing Areas (Princeton: Princeton University Press, 1960)があるが、これはまさに比較地域研究としての静態的な構造分析であり、これにたいして、有名なサミュエル・ハンティントン(Samuel P. Huntington)の『変革期社会の政治秩序』Political Order in Changing Societies (山内秀夫訳、サイマル出版会、1972年)は、比較研究としての動態的な変動分析だといえよう(これらの点については、藪野祐三『比較政治学のアプローチ』、砂田一郎・藪野祐三編『比較政治学の理論』<東海大学出版会、1990年>所収、参照)。いずれにせよ、ここでも地域研究が理論と応用の場として重視されざるを得ないのであるが、その場合でも、比較研究としての地域研究は、静態的分析および動態的分析を統合する総合科学として位置づけられよう。

こうしてはじめて「地域研究者は、ある地域に関心を限定するというその方法自体によって、ある危険に陥りやすい」(マテイ・ドガン/ドミニク・ペラッシー『比較政治社会学—いかに諸国を比較するか』<櫻井陽二訳、芦書房、1983年>)という地域研究者の陥穽から逃れられるのである。フランスの政治社会学者ドガンは、比較研究の原点に触れて、「比較することは、人間の精神に自然にそなわった作用である」「比較研究は自分自身の環境の特色をよりよく把握するためだけに行われるのではない。比較研究はまた、観察の対象を広げることで、社会現象の法則を発見し、偶発的なでき事の底に横たわっている一般的な原因を探究しようとするものである」、それは「社会科学が真に『科学』となりうるための手段でもある」と述べ、比較研究にきわめて高い評価と使命を与え

ている(同前書)。

ドガンは、比較研究によってこそケース・スタディが一般化され、全体的な見方が可能になるとの問題意識のもとで、具体的な方法としては、(I)主題によって注意深く選定された二国間の比較(二元比較)、(II)類似した諸国の比較、(III)対照的な諸国の比較、という三つの方法を提示している(同前書)。

ここにおいて比較地域研究は、もっとも先駆的に方法論が確立されてきた言語学と同様の地平に立つことができたと見えよう。

私たちの「東アジア比較研究」は、諸国間、諸地域間の類似性、対照性のどちらの枠組においても分析可能であり、それだけに二国間・二地域間比較研究から、さらに、多国間・多地域間比較研究へ、そして、東アジア<儒教文化圏>とは異なった他の文化圏との比較研究へと発展してゆく可能性を秘めている。

そうしたなかで、他の文化圏との間でも相互に許容し得る一般化された概念化やモデル化を行うことができるなら、「東アジア比較研究」は、私たちの身近かな国際環境をよりよく認識することによって、21世紀への開かれた国際化時代に有用な展望を獲得することができるのではなかろうか。

最後に、3年間の研究期間と1年間の取りまとめ期間の通算4年間にわたり、総括班代表をつとめさせていただき、様々の御指導を賜った皆様様に改めて衷心より御礼申し上げます、ここに擱筆いたします。

中 嶋 嶺 雄 (なかじま・みねお、1936年生)
東京外国語大学 教授、東京大学大学院社会学研究科国際関係論課程修了。社会学博士。
研究課題：国際関係論/現代中国学/東アジア地域研究。受賞：サントリー学芸賞(『北京烈』<筑摩書房、1981年>)。

文部省科研費重点領域研究
課題番号：01605002

学術月報

Japanese Scientific Monthly
Vol. 44 No. 3 通巻第555号

産学協力——相川賢太郎

特集：東アジア比較研究：その3

華僑から華人へ—東南アジア華人の思想意識の変容を探る—

——今富正巳

東アジア比較地域研究：北朝鮮・ベトナム——松本三郎

「比較研究」とは何か—3年間の研究を終えるに当たって—

——中嶋嶺雄

マクロライドを始めとする各種抗生物質並びに微生物由来の

新生物活性物質に関する研究——大村智

微生物の新しい機能開発のための基盤研究——山田秀明

酵母における遺伝解析系と転写制御系の新しい展開

——深沢俊夫, 東江昭夫

バイオエナジェティックス研究の展開——向畑恭男

高分子錯体の動的相互作用と電子過程——土田英俊

数値流体力学——保原充, 大宮司久明

総務庁統計局による平成2年科学技術研究調査結果(速報)の概要

——学術月報編集委員会

科学研究費補助金〔試験研究〕成果の紹介「素子開発」

古屋一仁, 奥山雅則

竜子雅俊, 樋口龍雄, 軽部征夫

若手研究者への手紙：「学会という名の観光旅行」?

——川原栄峰

散歩道：古くて新しいジギタリス——南原利夫

1991

3

日本学術振興会